

日本語要旨

「キリスト教ワーシップダンスにみる両義性 ―踊り手の内的体験と相互行為に着目して―」

河田真理

本研究の目的は、キリスト教のダンス実践である「ワーシップダンス」を「自―他」関係の一位相として捉え、実践にみられる相互行為と踊り手の内的体験に関する語りの分析によって、踊り手がその身体を通して他者との「関係」をどのように生き、またその「関係」が実践にどのようにあらわれるのかについて検証し、「両義性」という概念を用いてワーシップダンスを貫く「関係」の具体的様相を明らかにすることである。なお、本研究は、第1章については『聖書』とその関連資料の調査、第2章以降は筆者が欧米で行った3件のフィールドワークから得られた資料の分析による。

第1章では、ワーシップダンスの歴史の変遷において、聖書時代には「神―人」のつながりとともに「人―人」のつながりも尊重されたが、中世以降は、時代精神や聖職者の権威主義化の影響により「神―人」のつながりの軽視に伴って「人―人」のつながりも断たれたことが示唆され、「神―人」関係と「人―人」関係とは互いに呼応し合う関係にあることが見出された。

続く第2章では、教会付属のダンスチーム、ダンスカンパニー、そして国際的クリスチャンダンス組織へとその実践形態を拡大させている現代のワーシップダンスが、「教会」というコミュニティの結束やそうした枠を超えた、より大規模な「コミュニティ」の結束をめざしつつ、踊り手が「個」の信仰表現を探求していくという両義的機能を有することが示唆され、現代ワーシップダンスにおいて、「個」の信仰表現の深まりと、「個」と「個」のつながりの豊かさとは表裏一体の関係にあるのだと考察された。

そして、第3章では、ワーシップダンスにおける内的体験に関する踊り手の語りから、第1,2章でみてきた「神―人」「人―人」関係の具体的様相を検証した。その結果、踊り手の内的体験は、①踊り手の存在そのものに関わる体験、②動きの創出プロセスにおける体験、③動きの原理に分類された。①については、踊り手は常に他者（外界）とつながることへの志向と自己への志向とのせめぎ合いの中にあるということ、そしてワーシップダンスの実践を通して得られる踊り手の自己充実や成長とは、外界（他者）とのつながりに起因するということ、②については、動きの創出プロセスが「自己との対話」「外界との相互作用」「自他非分離的対話」という3つの側面から成ること、そして、③のワーシップダンスにおける動きの原理とは、「動かされつつ、動く」という受動的感覚と能動的感覚とのせめぎ合いであるということ、そしてこの動きの原理が「生かされつつ、生きる」という踊り手の生き方の投影であるということが示唆され、①から③の体験の根底に、「他者（外界）に貫かれつつ自己に収斂していく」という人間存在の根源的両義性をみることができると考察され

た。

第4,5章では、実践にあらわれる踊り手間、踊り手—観衆間の関係の具体的様相について検証した。第4章では、会衆全員で踊る「即興形式のワーシップダンス」における踊り手間の相互行為（同調反応）の記述と事象見本法による分析からその動きの影響関係を検証した結果、踊り手同士が互いの動き・表情・発話・空間の変化によりうみだされるエネルギーや感情を含む「力動感」や「内的イメージ」に共応し合いながら動きを展開させていく様子がみられ、この状況を「他の踊り手の身体に巨視的な自己の鏡像をみる」という鏡像現象の一端であると捉えた。このことにより、踊り手の身体にみる両義性の内実が具体的に理解された。

そして、第5章では、踊り手と観衆とが形式上分離した状況にある「作品形式のワーシップダンス」においても、舞台上の踊り手の表現、すなわち身体の動き、表情、視線、小道具による表現、空間の変化からうみだされる「力動感」や「内的イメージ」、さらに作品全体のダイナミズムに対して観衆が同調的に反応し踊り手を鼓舞するという相互行為によって、踊り手と観衆とが双方向的に影響し合う場が成立していることを示した。そしてこの状況を、「観衆が踊り手の身体に巨視的な自己の鏡像をみる」という鏡像関係の成立であると捉え、ワーシップダンスにおいては、「踊り手」「観客」といった境界さえも超えて、観衆は踊り手の表現の「受け手」でありながらも、「能動的」に踊り手を鼓舞する両義的存在であると考察された。

以上のことから、ワーシップダンスに本来的に内包されている「神—人」「人—人」のつながりとは、現代ワーシップダンスにおける踊り手の内的体験において、神（聖霊）との自他非分離的關係を軸に据えた、「他者（外界）に貫かれつつ、自己に収斂していく」という両義性を孕む体験としてあらわれ、また、実践においては「他者の身体に巨視的な自己をみる」という踊り手間、さらに踊り手—観衆間の同調反応にみる鏡像関係の成立として具現化していることが示された。そして、踊り手の内的体験と相互行為にみられるこうした「人—人」のつながりの基底には、「踊り手—神（聖霊）」の自他非分離的対話を通して「個」の境界を超越しようとする踊り手の深い精神性があることが見出され、このことこそ聖書時代の礼拝行為としてのダンスにも通じるワーシップダンスの神髄であると考察される。

そして、現代ワーシップダンスにおける「つながり」とは、「動かされつつ、動く」というように、受動的感覚と能動的感覚とのせめぎ合いという自己と外界との両義的プロセスを通して紡ぎだされるものであり、それはまさに、自己・他者・神との関係における「調和した動き（在り方）」を模索する行為そのもの、すなわち、自己・他者・神との関係における真に「調和した生き方」の模索であると結論づけられる。